

2026年7月19日

説教題『その声を聞いた者は生きる』ヨハネ福音書5：24～28

信仰って、なに？シリーズ⑥

主任牧師 加藤 誠

「はっきり言っておく。死んだ者が神の子の声を聞く時がくる。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。」(ヨハネによる福音書5章25節)

教会は日曜日を「主日（しゅじつ）」と呼び、「日曜礼拝」を「主日礼拝」と呼びます。これは初代教会の人々が「主イエスが復活の命をあらわされた日曜日」を「主の日」と呼ぶようになったことに由来します。「主の日」とは、旧約聖書では「神が決定的な御業をあらわされる日」を意味しましたが、主イエスの弟子たちは、主イエスが復活の命をあらわされた日曜日こそ「神が決定的な御業をあらわされた日」「神の愛と赦しの十字架の意味がはっきりと見える形で示された日」として、この日を「主の日」と呼び始めたのでした。

ただ、もともとユダヤ教徒であった主イエスの弟子たちは、主の復活後もしばらくの間はユダヤ教の教えを守って金曜日の夕方から土曜日の夕方にかけての安息日を大切に守っていたので、すぐに礼拝の日を安息日から日曜日の主の日に変えたわけではありませんでした。しかし異邦人のクリスチャンが増えてくるにしたがい、ある時点で礼拝の日を安息日から「主の日」に変えるという大胆な決断に導かれたのでした。

礼拝の日を安息日から日曜日に変えることは「単に曜日が変わった」ことにとどまらない大きな意味がありました。一つは、律法の「守らねばならない義務」からの解放です。「守らねばならない義務」の象徴だった安息日は、「神の愛を喜ぶ日、自由をもって神を賛美する主の日」に取って代わりました。また、律法では主なる神への服従のしるしとして「跪いて祈ること」が尊ばれたのですが、教会は「立ち上がって祈り、賛美することこそ、主の日にあふさわしい」と考えました。なぜなら、キリストと共に新しい命に立ち上がらされた者は、その喜びを「立ちあがって祈り、賛美するように招かれている」と考えたのです。

そしてさらに、日曜日は創世記の天地創造では第一の日。神が「光あれ」と言われて暗闇の中に光を創造された日。その日に、主イエスは墓の中から起こされて復活の希望をあらわされた。日曜日という「主の日」は、十字架の愛と赦しの光に照らされて、新しい命をいただく日。主なる神が、いつか最後の最後にその愛の御業を完成される「主の日」を望み見て、地上での旅を歩いていく「始まりの日」。その「主の日」の日曜日の礼拝を、教会は大切に選び取ることを決めたのでした。

新約聖書には、イエス・キリストによってもたらされる「新しさ」のイメージが満ちています。「新しいぶどう酒」「新しい教え」「新しい上着」「新しい契約」「新しい創造」「新しい人」「新しい天と地」「新しい名前」、そして「新しい歌」。クリスチャンの信仰は、主イエスからいただく「新しさ」を生きることです。バプテスマがその代表でしょう。バプテスマによってキリストと共に葬られ、古い自分に死に、

キリストと共に起こされ、新しい命に生きる者とされる。そして毎週の最初の日、「主の日」の礼拝に「新しい歌」をいただいて、一人ひとりがこの世界に出かけていく。これがクリスチャンが招かれている信仰の生き方なのです。

「はっきり言うておく。死んだ者が神の子の声を聞く時がくる。今や、その時である。その声を聞いた者は生きる」（ヨハネ5：25）。今朝と一緒に読んだ言葉は、ヨハネ福音書5章でベトザタの池で38年間病気のために寝たきりとなってきた人が癒された後で主イエスが語られた言葉です。この主イエスの目の前には「安息日に癒しをしてはいけない！」と書いて主イエスを責め「こいつを何とか殺してやろう」と憎しみに燃える人たちがいました。彼らがいったいどこで主イエスと衝突しているかというのと、「安息日に床を担ぐこと」を巡ってです。彼らは「安息日に床を担いで歩くのは良くない。それは律法違反だ」と言って憤りました。それに対して主イエスは「安息日こそ、この人が主なる神を賛美して、床を担いで歩きだすのにふさわしい」と考えられたのです。38年間、ベトザタの池のほとりで寝たきりで過ごしてきたこの男の人にとって、「床」とは、自分の病気への嘆き、自分を助けてくれない周りの人たちへの文句、人生への諦めがずっしりとしみ込んだ「床」でした。しかし主イエスは、ここで、この人を呪いとあきらめの中に閉じ込める律法主義の考え方に激しく挑みながら、この人の嘆きと文句と諦めがしみ込んだ床を担いで歩く「新しい光」、「新しい命の力」をもって、彼を立ち上がらせられたのです。彼は過去に縛られて、文句を並べて生きる歩みから、神の子の声を聴きながら新しい命を生きる、過去を軽やかに担ぐ歩みに起こされていったのでした。

人は言葉によって死にもし、生かされもします。私たちは、隣人に対してどういう言葉を語ることができているでしょうか。死の言葉か。それとも命の言葉か。人を怒りと呪いの過去に縛る言葉か、それとも人を喜びと賛美に招いて、これからと一緒に望み見ていく希望の命の言葉か。墓から起こされた神の子、主イエスの命の言葉を受ける時、人はたとえ死の中からも起こされ、新しい命の歩みを始める。これが「主の日」の証言であり、聖書の福音です。その命の言葉を受け取り、私たちもまた誰か隣人と、主イエスの命と希望を分かち合っていく者にされていきたいと思うのです。

毎週土曜日に大井教会が受けている恵みに、東京バプテスト神学校の教会音楽科の授業があります。いろいろな教会から、決して近くはない距離を通してこられる受講生の方々の姿に「教会の働きにより良く仕えていきたい」という誠実で熱い祈りを感じて大きな励ましを受けます。大井教会のメンバーも何人もが授業に参加していますが、その開講科目の中に「会衆賛美」の授業がある点が、バプテスト神学校ならではのようです。というのも、バプテスト教会の主日礼拝において、最も大切な神奉仕の一つが「会衆賛美」だからです。音楽の賜物に秀でた人が賛美をささげる礼拝に重きを置く教会がありますが、バプテストは「会衆一人ひとりが主イエスから受けた新しい命を生き、神賛美をもってこの世界に遣わされていく」ことを大切にします。今朝の主日礼拝も、私たち一人ひとりが賛美を携えて出かけていく礼拝となりますようにと、祈りを合わせたいのです。